

2023年4月9日（日）「いのちの全権を握るイエス」

ヨハネ 11:17-27

17 さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた。18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。19 大勢のユダヤ人が、兄弟ラザロのことでマルタとマリアを慰めようとして来ていた。20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家で座っていた。21 マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。22 しかし、あなたが神にお願いすることは何でも、神はかなえてくださると、私は今でも承知しています。」23 イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、24 マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じます」と言った。25 イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。26 生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」27 マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じています。」

#### 【序論】

イースターおめでとうございます。今年は2月22日（水）から受難節に入り、先週一週間を受難週として過ごしてまいりました。これらの期間に、私たちは「死」という事柄と真正面から向き合うべきでしょう。主イエスの十字架の死を考えるとともに、やがて訪れる自分自身の死に思いを向ける。この期間をどのように過ごしたかによって、私たちの中でイースターの意味が変わってくるのです。私自身も40年余り生きましたので、もし寿命を全うするとしたらちょうど折り返し地点あたりにいると思います。しかし、人生というものはいつ終わりの日を迎えるか、誰にも分かりません。今年中であるかもしれないし、明日かもしれない。だからこそ、今自分は何をすべきであるかを考えるのです。主イエスがご自分の死について認識しておられたことは、はるかに切迫性がありました。なぜなら、主は間もなく自分が捕らえられ十字架に架けられて死ぬことを、繰り返し弟子たちに語って聞かせておられたからです。主イエスの御言葉には、どんなときにも遺言のような響きがありました。主イエスがご自分の死について語る時、もう一つの重要な意識が含まれていた。それは、死後三日目に甦ることも想定しておられたということです。主イエスの中における死と復活のイメージがどのようなものであったか、正確に説明することはできませんが、それを考え抜くことは私たち自身の死と復活を理解するための鍵となるでしょう。主が持つておられた認識に近づくことができるからです。私たちの肉体の死とは何を意味するのか、復活はどのように起こるのか。今日のラザロの復活の記事は、これらのことを私たちに教えてくれるに違いありません。限りある時間の中で生きている私たちにとって、死と向き合うことは人生そのものを直視することだと言ってよいでしょう。

## 【本論】

以前には主イエスの復活後の出来事が描かれている福音書の記事から説教をさせていただいておりましたが、一通り網羅してしまいましたので、ここ数年は「復活の意味」を考える箇所を選択しています。今日はヨハネ福音書だけが扱っている「ラザロの復活」の記事を見てまいりましょう。

## 本論1. 厳然たるラザロの死

さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた。(11:17) ラザロという人の名前が唐突に出てくる感もありますが、11章の冒頭を見ると彼の人となり少し分かります。

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロと言った。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭った女である。その兄弟ラザロが病気であった。(11:1-2)

新約聖書では、ラザロよりもその姉妹マルタとマリアの方がよく登場します。有名な箇所としては、マルタがもてなしに忙しく動いている間にも、マリアは座って主イエスのお話に耳を傾けていたという記事です(ルカ 10:38-42)。ここではその評価はさておき、この妹のマリアは主イエスの受難が近づいているときに高価なナルドの香油を惜しみなく注いだ女性と同一視されています(マルコ 4:1-9)。そして、この姉妹には病弱な弟がおり、その名をラザロと言いました。ラザロという名前には「神が助け給う人」という意味があり、彼の人生そのものを表しているとも言えます。

彼らの住まいはベタニアという小さな村にあったようで、この村はエルサレムの東約3.2kmに位置し、オリーブ山の斜面にありました。「病人がいた」「病気であった」と繰り返されているように、ラザロは深刻な病に罹り、危篤状態にあったようです。この報せを受けたとき主イエスがどこにおられたかという、「ヨルダンの向こう岸、ヨハネが初めに洗礼を受けていた所」(10:40)であり、距離にして30km以上離れた所でした。ベタニアまで一日かかる距離があり、苦しんでいるラ



ザロと対面するには急ぐ必要がありました。ところが、このとき主イエスはなぜかすぐには出発せず、敢えて二日置いてから動かされたのです。

**ラザロが病氣だと聞いてから、なお二日間同じ所に滞在された。(11:6)**

この不可解な行動に読者は戸惑いを覚える。生と死の境にある友のためになぜすぐに駆けつけてくださらないのか。マルタとマリアがすぐに来てほしいと願っていたことは明らかであり、主イエスもそのことを理解されていたはず。しかし主は、あたかもラザロが死ぬのを見届けるかのようにして出発されたのです。

今日の箇所で「ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた」とありますのは、マルタたちから派遣された使いが一日がかりで主の許に来て報告し、それを聞いてから二日間滞在を延ばされ、更に一日かけてベタニア入りしたことを示します。ラザロは使いが主の許に到着する前に死んでしまったのかもしれませんが。著者が「四日」という日数にこだわるころには、この時間が人の死を確実にすることを意味していたからでしょう。肉体的な死が正確に確認できない場合があったため、まだ息のあるうちに埋葬してしまうようなことがないように、三日間は用心したようです。ユダヤ教ラビの文献によると、「三日間、死者の魂は屍の上を漂っていて、元の古巣に戻ろうとしている」と考えられていました。主イエスは何となく、この当時の習慣を前提に時間を計算しておられるように思えてなりません。ご自身、こんなことまで言うておられるからです。

**そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。私がおの場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」(1:14-15)**

ここで私たち読者は、改めて「人とは死ぬべき存在なのだ」ということを認識させられます。死ぬのはラザロだけではなく、私たちもそうです。人生の道半ばで世を去らなければならぬこともある。ラザロの無念、無情な死の現実が突きつけられていたのです。

## 本論 2. 主イエスとマルタの対話のズレ

**大勢のユダヤ人が、兄弟ラザロのことでマルタとマリアを慰めようとして来ていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家で座っていた。(11:19-20)**

当時のユダヤの習慣として、人が亡くなるとその日のうちに埋葬し、そこから七日間は遺族の慰めの期間が持たれたようです。ですから、この時はその期間の真ん中ら辺であったことが分かります。遺族にとっては心の整理をつけようとしている時でありました。

マルタとマリアの行動の違いがここでも明らかになります。「イエス様が来られた」という噂が飛び込んできて、マルタは出迎えに行った。マリアが座ったままであったのは、彼女が不精だったわけではなく、それが遺族の取るべき当然の「喪に服する」姿勢だったのです。むしろ、マルタの行動力こそ周囲を驚かせるものでした。

さて、ここからマルタとイエスとのやりとりが始まっていきますが、その内容に注目しましょう。二人の対話には不思議な「ズレ」があるのです。

マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いすることは何でも、神はかなえてくださると、私は今でも承知しています。」(11:21-22)

マルタの言及を精査しましょう。彼女は主イエスに対して何を求めているのか。彼女は主イエスがあらゆる病を癒してきたことを知っていました。瀕死のラザロのためにすぐに来ていただいたかったのは、その病を癒していただくことが目的だったと思われます。だから「もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と言っているのです。まずここに「癒し主」としての主への信頼が表れている。続く22節には、神と人との間の仲介者として祈ってくださる主イエスへの希望が表れています。「あなたが神にお願いすることは何でも、神はかなえてくださる」と。つまり、マルタは何らかの意味でラザロが復活させていただけると信じているのです。彼女の中で、地上におけるラザロの命については諦めがついたところであったと思われます。弟は帰らぬ人となってしまった。この事実は覆すことができない。このことを心に受け入れつつあったのです。ところが、次の23節を読むと、マルタと主イエスの「復活」理解にズレが存在することが分かってきます。

イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じています」と言った。(11:23-24)

ここで主イエスが言われる「復活」とは「今この時」のことであり、それに対してマルタは「終わりの日」(世の終わりに死者が救いと審きに分けられる日/ダニエル 12:12)のことが言われていると理解している。マルタの中で、主イエスご自身に人を現実に甦らせる力があるということは、まだ信じられていないように見受けられます。いえ、ここで主イエスがそんなことを言っておられるとは思ってもみないようなのです。ここに、彼女の中での主イエスへの信頼は、「神に対して特別な祈りをささげてくださいる方」「その祈りは確かに聞かれている」という段階であったと考えられます。しかし、主イエスがマルタに求めておられる信仰とはその程度のものではなく、主ご自身が死者をダイレクトに復活させる力を持つ方であること、更に言えば、イエスこそが永遠のいのちそのものであることを認識する必要があったのです。この時にラザロが復活するためには、このことを信じるマルタの信仰が不可欠であった。これから起こるラザロの復活劇は、ひとえにマルタのためであると言っても過言ではないでしょう。そこで、主はもう一度マルタに問われます。

### 本論3. マルタの信仰はイエスの復活(理解)に飲み込まれた

イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(11:25-26)

この問いはマルタに信仰告白を促しています。主イエスは真っ直ぐにマルタの目を見てこのことを語られたはずですが、「復活であり、命である」とは、何を意味するのか。いつの時点のことを主は語っておられるのでしょうか。マルタが既に信じている「終わりの日の復活の時に復活すること」以上のことを信じるよう、主が求めておられることは確かです。「私を信

「**信じる者は、死んでも生きる**」、これがラザロの現実に向けて語られているとするならば、死者の復活は今まさにこの時に起こることが予告されていることになるでしょう。そして、続く記事を読んでいきますと、ラザロは肉体的に甦るのです (11:44)。このラザロの復活は、マルタの信仰に基づいてもたらされました。

マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じています。」 (11:27)

「信じません」と答えたら、この奇跡は起こらなかったかもしれません。しかし、マルタの返答は若干主イエスの問いに対して直接答えてはいないのが気になります。主が「**私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか**」と問われたのに対し、マルタは「**あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じています**」と返答しているのです。しかし、その返答は主イエスの要求を満たしていません。もし主イエスが世の終わりに来られるはずのメシアであるなら、どの時代であっても死者の復活を実現することができるでしょう。ここでマルタがどの程度の理解を持っていたかは分かりませんが、とんでもない返答が導き出されているのです。主イエスは本来、最終的な世界の救済者／審判者として世に来られるはずのお方であるのに、その方が現在の世界に来てしまわれたという「時間的超越」を彼女は言い表している。終末的な王、すべての人の永遠の全権を握っておられる方、命を与え命を取り去ることのできる方、永遠のいのちそのものであられる方。主イエスにとって死者を復活させることは、現在と未来において一つなのです。ラザロの肉体的な復活は、私たちが地上において新しいいのちに甦ることを予表している。そして、その新しいいのちは、永遠の世界へと続いている。主イエスとマルタとの間で交わされていたやりとりには、実はこのことの真理が色濃く現れていたのです。信じる者は、もはや現在の命と永遠のいのちとが分離できないものとなる。「**今と来るべき時の命**」(Iテモテ 4:8) が一つとなってしまふ。確かに、肉体的に死ぬことは避けられませんが (ラザロも然り)、その人は永遠に滅びることのないいのちを持っているのです。

### 【結論】

このイースター礼拝にあたり、復活の真理を改めて学び直しました。今日、主イエスがここにおられる一人びとりに「このことを信じるか」と問うておられます。マルタが信じたことを、私たちも信じることもできるのです。このマルタも今は墓の中で眠っていますが、永遠に生きる者となって地上の生涯を終えました。そして、このエピソードは世の終わりまで語り継がれるでしょう。私たちも、この新しいいのちを受けているはずで、もう一度信仰を新たに、マルタと同じ告白をここにしたいと思えます。

はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じています。

(11:27)

【祈り】

甦りでありいのちであられるイエス・キリストの父なる神様。マルタの不十分な復活理解に対し、主イエスはご自分がどのようなメシアであるかを認識させるため、鋭く切り込んで行かれました。そして、彼女自身のことばでもって、主イエスがあらゆる領域において人のいのちの全権を握る方であることが告白されました。私たちもやがては死ぬべき存在ですが、主が御力をもって復活させてくださることを信じて、この人生を歩みぬきたいと思いません。私たちの信仰を新たにし、復活の主と共に歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
御子イエスを死より甦らせ、復活の初穂とならせ給うた、父なる神の愛、  
マルタを信仰告白へと導き、ラザロを死より目覚めさせ給うた、主イエス・キリストの恵み、  
終わりの日、信ずる者と共にまし、新しいいのちの扉を開き給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。